論　文

雑作雛形の書誌的考察*

麓　和善**　河田克博***　内藤　昌****

序
1. 江戸時代中期
2. 江戸時代後期
3. 明治時代
結

序

木工事を主体とするわが国の伝統建築構法においては，世界的にも比類ないほどに発達をみた継手・仕口の技術に最も関心が高く，それだけに建築技術書のなかでも一分野をなしうるだけの史料が著述刊行されている[(1)]。しかしながら，継手・仕口ほどの技術体系はないまでも，たとえば軸組・小屋組等の木部架構，組物組方，屋根葺などの諸構法，およびそれらを比較的単純に組合わせることによって成立しうる塀・柵・橋から雪隠・蔵・廊・鷹小屋などの付属建築の構法に関するものなどを，全国的に博捜・集収すると，その史料数は60本以上にもおよぶ。

本稿では，これらの建築技術書を雑構法ないしは雑建築構法に関する雛形本という意味において「雑作雛形」と総称し，江戸時代中期（寛文～寛延，1661～1750），後期（宝暦～慶応，1751～1867），明治時代（1868～1911），以上3時期に時代区分して，著述刊行年順に――年代不詳の史料については記載内容により推定――書誌的考察を行なう。そして，個々の雑作雛形の技術内容および構成様態等に関する考察は別稿に譲るとして，とりあえず書誌のうえから雑作雛形の変遷を通観するとともに，その特質を論ずることとしたい。

---

* 1991年10月16日受理，近世建築書，構法，雑作，公刊大衆化
** 名古屋工業大学
*** 修成建設専門学校
**** 名古屋工業大学

(1) 内藤昌・渡辺勝彦・若山滋「継手・仕口雛形の書誌と類型　継手・仕口雛形の研究その1」，『日本建築学会計画系論文報告集』第360号，昭和61年2月。若山滋・渡辺勝彦・内藤昌「継手・仕口の基本型と変化型・複合型　継手・仕口雛形の研究その2」，『同』第370号，昭和61年12月。内藤昌・岡本真理子・渡辺勝彦・若山滋「継手・仕口雛形の歴史的変遷過程　継手・仕口雛形の研究その3」，『同』第384号，昭和63年2月参照。

1.　江戸時代中期

江戸時代中期の史料としては，むしろ例外的ともいえるほどに早く成立した『愚子見記九』と，『御作事方仕口之図』・『組物』・『大工雛形　手鏡』の4本にすぎない。その内容は次のとおりである。

①　『愚子見記　九』（法隆寺所蔵）

筆写本，紺地紋入表紙，袋綴，1冊（全9冊），横本（13.6cm×19.6cm）

幕府京都御大工頭中井家の技術を集大成したものとして知られる『愚子見記』（石居立柱建，禁庭，社頭伽藍，諸寺社，屋舎城郭，武用，小道具，算数度量，諸積）全9冊中の1冊である。中井家配下の頭棟梁（「受領之棟梁」）平（今奥）政隆によって，寛文11（1671）年から貞享3（1686）年頃に編纂され，なかでも本稿で問題とする第9冊「諸積」は，第1～8冊までの付録的役割で，貞享元（1684）年に成立したと考えられる。(2)

記載内容は，中井家の過去の代表的な作事例からの積算資料を主として集成しており，構法関係では瓦・檜皮等屋根葺，築地等左官仕様，御殿・堂等の木積りほかが記されている。

②　『御作事方仕口之図』（東京都立中央図書館所蔵）

筆写本，薄茶地模様入布表紙，折本，1帖，横本（23.0cm×33.4cm）

奥書によると享保14（1729）年3月に，幕府作事方大棟梁甲良宗員（甲良家第4代志摩相員）が著している。

記載内容は，水盛・土台据から軸組・小屋組等の木部架構，柵・門・塀・井戸構・雪隠等付属建築，継手・仕口など構法全般におよんでいる。図は斜投象・正投象・伏図など適宜使い分けている。

③　『組物』（東京都立中央図書館所蔵）

筆写本，萠黄地紋入布表紙，1巻，巻子本（28.8cm×1505.7cm）

奥書によると，享保18（1733）年2月下旬に，甲良家の門弟森万右衛門定教が，建仁寺流の定法を速やかに知るべく記したもので，「建仁寺流官匠甲良印」の朱角印が押されている。

記載内容は，組物の部材構成の記述で，それぞれ隅と平の立面図・伏図が描かれ，使用する斗や肘木の数量が記されている。

④　『大工雛形　手鏡』（国会図書館所蔵）

筆写本，焦茶表紙，袋綴，1冊，横本（13.6cm×19.5cm）

表紙題箋に「大工雛形　手鏡」，扉に「手鏡　幀泰」とあり，また巻末には「元文四己未（1739）／八月廿八日／児玉源助」（／印改行，カッコ内筆者，以下同），その2丁前には「此主児玉与次兵

---

(2)　岡本真理子・渡辺勝彦・内藤昌「『愚子見記』の成立」，『日本建築学会計画系論文報告集』第369号，昭和61年11月。内藤昌・渡辺勝彦・麓和善・岡本真理子・河田克博『愚子見記の研究』，昭和63年6月，井上書院刊参照。

衛」と記されている。

記載内容は，絵様・規矩・木割とともに，組物組方を示す立面図・伏図が収録されている。

2. 江戸時代後期

江戸時代後期は，寛政（1790）頃を境として状況が異なる。まず，宝暦から天明頃までの約40年間には，『角木図格　乾』と『番匠町家雛形　上下』の２本しかない。ところが，寛政から慶応までの約80年間には44本にもおよぶ史料が著されている。以下，これらの史料について考察する。

⑤　『角木図格　乾』（静嘉堂文庫所蔵）

筆写本，薄茶地金模様入布表紙，１巻（全２巻），巻子本（36.1cm×974.5cm）

乾坤２冊構成の１冊である。乾の巻奥書に「右之図格池上延世江伝所無相違被図之／稽古之巧至也。全于他不可相伝者也。／于時宝暦乙亥（1755）載」とあり，また坤の巻末に「池上延世図之囘囘」とある。池上延世とは，加賀藩作事奉行を勤めた池上家第７代猪右衛門延世のことで，多くの写本を残している。

記載内容は軒廻の規矩を主体とし，構法関係では組物組方が図示されている。

⑥　『番匠町家雛形　上下』（国会図書館所蔵他）

木版本，紺表紙，袋綴，１冊，美濃本(25.3cm×17.7cm)，匡郭(22.1cm×15.1cm)，単辺，無界，版心「町家雛形（丁数）」

刊記によると，明和７（1770）年９月に，著者十一堂広岡保教，書林須原屋茂兵衛で版行されている。

記載内容は，「四角化粧がま仕様」・「上下定りたる所はぎ付る方立仕様」・「小間返之物手違組仕様」などの特殊な継手・仕口や，繰見世の台敷，上戸の釣り方が前半部に記され，後半部には規矩が記されている。いずれも特殊な構法で，それを文章主体で詳しく説明している点が本書の特色である。

⑦　『造作弁図解　上下』（金沢市立図書館所蔵）

筆写本，紺地紋入布表紙，１巻，巻子本（27.7cm×1432.3cm）

奥書等筆写年代に関する記載はない。

記載内容は，塀・狭間・橋金物・橋・門・渡櫓などで，図を主体とし，若干の説明文が付いている。これらのうち，「一之門」・「二之門同渡櫓」の図は，金沢城石川門表門・櫓門と一致している。したがって，本書はこれらの竣工した天明８（1788）年以後の史料と考えられる。

⑧　『大工雛形　規矩鑑集　蔕指口』（国会図書館所蔵）

筆写本，焦茶表紙，袋綴，１冊，横本（12.9cm×19.2cm）

表紙題箋に「大工雛形　規矩鑑□　蔕指口」，扉に「規矩鑑集／蔕指口／若杉」と記されている。大は家屋・橋から小は継手・仕口・金具・瓦にいたるまで，大工の知るべき内容を百科

事典的に網羅しており，まさに「規矩鑑集」といえる。

⑨　『諸絵図　全』（東京都立中央図書館所蔵）

筆写本，薄緑表紙，折本，1帖，横本（27.0cm×37.9cm）

巻頭に「官大棟梁／甲良若狭棟利」の署名がある。甲良棟利は幕府作事方大棟梁甲良家5代目で，享保11（1726）年4月27日に跡式を行ない，同20年4月4日に病死している。

記載内容は，まず櫓門・冠木門・二重櫓・三重櫓・天守（江戸城）・多聞櫓の平・立・断面図が記され，つづいて練塀・雎吻（鯱）・軒廻り・窓廻りの詳細図，火の見番所（櫓）・築地・釣橋・高欄橋・表門・長屋門・船蔵・米蔵・金蔵など付属建築の平・立・断面図が記されている。図には木割・仕様等の説明文が適宜付されている。練塀以下後半部が雑作雛形である。

上記のとおり巻頭に甲良棟利の署名があるが，練塀説明文中に「右は享保年中北條新左衛門差出候書付也。／以之寛政年中初メ練塀ニ用之出来如此。」とあるので，原本は甲良棟利によって著されたものの，本書の成立年代は一応寛政末（1800）頃と考えられる。

⑩　『御櫓向其外共』（秋田県立秋田図書館所蔵）

筆写本，焦茶表紙，1巻，巻子本（27.4cm×952.5cm）

秋田佐竹藩の大工戸崎家伝来史料である。

奥書等筆写年代および著者に関する記載はないが，巻末に幕府大棟梁辻内家の印「官匠辻内」が押されている。

記載内容は，二重櫓・三重櫓・多聞櫓の平・立・断面図につづいて，軒廻り・窓廻り・雎吻（鯱）の詳細図，および練塀・火の見番所（櫓）・高欄橋・釣橋・船蔵・表門・築地など付属建築の平・立・断面図が記されている。これらは，記載順および説明文に若干の相異はあるものの，いずれも『諸絵図　全』と同じ内容である。

⑪　『番匠秘事　瓦　全』（国会図書館所蔵）

筆写本，焦茶表紙，袋綴，1冊，横本（12.0cm×17.1cm）

表紙題箋は「番匠秘事　瓦　全」，扉題は「瓦」となっている。また，扉には「享和二(1802)年戊六月写之」，「川村氏」と記されている。

記載内容は，平瓦・丸瓦・桟瓦をはじめ各種役物瓦まで，ほとんど網羅的に図示し，その名称を付している。瓦を専一に扱った史料は管見するところ本書が唯一である。

⑫　『番匠作事文章』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，赤表紙，袋綴，1冊，中本(18.0cm×12.3cm)，匡郭(15.9cm×11.0cm)，単辺，有界，版心「作事（丁数）」

本書は，本文が同一で，表紙題箋が「番匠作事文章」となっているものや，表紙題箋および扉題が「大工作事往来」となっているものなどがある。しかし，巻首題・尾題はいずれも「番匠作事文章」となっているので，本稿ではこれを標題として用いることにする。

作者，刊行年は不明であるが，「大工作事往来」と記された扉には書肆松坂屋の上梓である

旨記されている。

化政期から幕末にかけて類書の続出した，大衆向のいわゆる「往来物」で，記載内容は，建築用語を羅列しながら構法一般を概説し，頭書にその挿図を示したものである。

⑬　『和様唐様接物図并伏図』（石川県立歴史博物館荒木家文書所蔵）

筆写本，無表紙，１巻，巻子本（24.5cm×798.1cm）

奥書に「文化四丁卯（1807）歳十一月吉日　荒木乗寛　花押」とあるが，巻中の木割の説明文には，「恭福印」と記されたものと，「乗寛日」と記されたものがあることから，恭福の記したものを文化４年に荒木乗寛が写すと同時に，さらに木割の説明を書き加えたと考えられる。この恭福とは，建仁寺流大工藤岡庄左衛門恭福のことで，宝暦９（1759）年に加賀藩御大工，安永３（1774）年に御大工頭となり，同７年に53歳で没している。[3]

記載内容は，標題のとおり和様・唐様組物の立面図と伏図からなり，特に伏図は組物の組方を説明したものである。

⑭　『（高橋吉規伝来　組物図）』（高橋家所蔵）

筆写本，紺地金模様入布表紙，１巻，巻子本（27.2cm×566.9cm）

無題であるが，奥書に「吉規回」とあり，記載内容から上記のとおり仮称する。「吉規」は高橋重左衛門の正名とされ，同家所蔵の文化７（1810）年年紀の文書[4]にその名が見えることから，本書の筆写年代をとりあえずその頃と考えておく。

記載内容は，『和様唐様接物図并伏図』とほとんど同じであるが，蟇股・木鼻・日本様之組物ノ割他を欠いている。また，図は両者とも同じであるが，木割の説明文は一部を除いて異なっており，特に『和様唐様接物図并伏図』において「乗寛日」あるいは「恭福印」と付記された説明文を欠く一方，本書にのみ記された説明文もある。

⑮　『今西氏　家舶縄墨私記　乾』（東京都立中央図書館所蔵）

筆写本，朱表紙，袋綴，１冊（全２冊），美濃本（26.6cm×19.0cm）

乾坤２冊からなり，乾が建築，坤が造船に関する内容である。[5]

表紙題箋，扉題とも「今西氏　家舶縄墨私記　乾」となっている。坤の跋文に「此書ハ文化九申（1812）皐月，三崎の官舎に／ありて徒然之折柄，此事を思始り。／雖然書図拙して，然も挙様卑過／多かるへし。唯子に譲事にして／同十酉初春同官舎おゐて満尾ス。／文化十癸酉年九月　今西幸蔵」とあり，文化９年から10年にかけて，今西幸蔵によって著わされたものであることが認められる。今西幸蔵は，当時浦賀同心組頭を勤めており，建築には素人ながら施

---

(3)　田中徳英「加賀藩大工の研究――主として建仁寺流大工山上家について――」，昭和55年度科学研究費補助金奨励研究（Ｂ）報告書，昭和56年３月刊参照。

(4)　『文化七年　石動山ト大窪ト山境之帳　午正月書記ス』の奥書に，「（前略）大窪村高橋重左衛門（在判）」とある。

(5)　生活史研究所編『家舶心得集（今西氏家舶縄墨私記）』，生活史研究所年報第１号，昭和60年刊。石井謙治校訂『今西氏家舶縄墨私記　坤』『日本庶民生活史料集成』第10巻，昭和45年　三一書房刊所収。

主側の責任者としての実務上の知識をまとめたものといえる。

しかしながら，その内容は，門尺，地業，測量，仕様書の書き方，方形造・入母屋造ほかの構法説明図，木材，屋根葺など広範囲かつ詳細である。

⑯　『（門外十七種）』（東京国立博物館所蔵）

筆写本，白表紙，大和綴，2冊（全16冊），横本（第11冊27.6cm×41.8cm，第13冊30.9cm×41.8cm）

第1冊に門の記述があることから，「門外十七種」の登録名が付されているので，あえて本書仮題とする。

第16冊の奥書に「右工術指南せしめ一ト巻伝進申候／文化十一甲戌（1814）年四月吉日　匠／八木又三郎様」とあり，その下に「大久保」・「延治」と読めるふたつの角印がある。そして，第11冊目録冒頭に「喜平治之図／和様唐様三手先枓組」，第13冊 冒頭に「家根廻り絵図　喜平治之図」と記された付箋が付いている。

記載内容は，第11冊が組物の部材構成とその組方の記述で，まず立面図が示され，その後に下層から一段ずつ組物の伏図が描かれ，使用する斗と肘木の数量が記されている。また，第13冊には，屋根瓦葺・小屋組の図が収録されている。

⑰　『祝融要務』（国会図書館所蔵）

筆写本，茶表紙（後補），袋綴，1冊，美濃本（26.0cm×19.1cm）

序および跋文によると，文化11（1814）年6月に，藤原誉純によって著されている。

本書は防火書で，防火および火災にあった場合の心得などが，10項目にわたって記されている。なかでも「土蔵製作」の項では，軸組材料・木舞下地・壁塗・屋根下地・瓦葺・窓・戸口等に関する詳細な記載があり，構法雛形としてもその価値は高いといえる。

⑱　『神社仏閣　柱建往来』（河内家所蔵他）

木版本，紺表紙，袋綴，1冊，中本(18.1cm×12.5cm)，匡郭(15.4cm×11.6cm)，単辺，有界，版心「柱立往来（丁数）」

刊記によると，文化13（1816）年秋に東里山人が撰し，岩戸屋喜三郎によって梓行されている。東里山人は，鼻山人の名でも知られる戯作者であるが，もとは御作事奉行支配御大工頭組勘定役であった。

記載内容は，冒頭に「凡神社仏閣堂塔／伽藍坊舎寺院新／規造営仕形荒増 取扱（後略）」とあるように，基礎から造作・儀式にいたるまで，建築用語を羅列しながら，構法一般を概説したものである。

⑲　『帷指図』（山下家所蔵）

筆写本，黄縞入表紙，袋綴，1冊，横本（13.8cm×20.0cm）

跋文によると，本書は作事方役所定小屋に備付られていたのを，数人の手を経て大沢（貞次郎）貞頼が写したものである。

記載内容は，継手・仕口を主体とするが，三四五の曲尺・門尺・柿葺・小屋組・床組・軸組

等の図が記され，最後に前記『神社仏閣　柱建往来』の全文を引用している。なお，この引用文の最後に，撰者東里山人は，御作事奉行支配御大工頭組勘定役細川浪助であることが付記されている。

⑳　『組物桝肘木絵図』（東京大学所蔵）

筆写本，茶表紙，１巻，巻子本（26.8cm×2217.5cm）

料紙継目付近に「彊」の丸印が押されているが，これは幕府作事方大棟梁甲良家第９代吉太郎棟彊の印と思われる。棟彊は文政２（1819）年４月に跡式を受け，天保５（1834）年12月に隠退しているので[6]，本書はその頃に著されたと思われる。

記載内容は，各種組物の部材構成と組方に関するもので，立面図および一層（一手先）ごとの伏図・見上図が描かれ，使用する斗と肘木の数量が記されている。

㉑　『三之巻』（秋田県立秋田図書館所蔵）

筆写本，無表紙，１巻，巻子本（27.7cm×1493.8cm）

秋田佐竹藩の大工戸崎家伝来史料である。巻頭に「三之巻上中下絵図／二葉流」と記されている。「上」・「下」の部分は，上記『組物桝肘木絵図』からの引用で，組物の部材構成と組方が記されている。「中」の部分は，鴨栓に関する規矩である。

㉒　『五之巻』（秋田県立秋田図書館所蔵）

筆写本，無表紙，１巻，巻子本（27.7cm×836.7cm）

本書も秋田佐竹藩大工戸崎家伝来史料である。巻頭に「五之巻」と記されている。

記載内容は，組物の部材構成と組方に関するもので，『三之巻』と同様に，『組物桝肘木絵図』からの引用である。

㉓　『（工術抜書）』（秋田県立秋田図書館所蔵）

筆写本，無表紙，１巻，巻子本（31.4cm×856.1cm）

本書も秋田佐竹藩大工戸崎家伝来史料である。奥書はないが，巻頭に「大久保」，巻末に「大久保」・「延治」の角印がある。このうち，巻頭の「大久保」と巻末の「延治」は，前述『（門外十七種）』第16冊奥書の角印と同じである。

記載内容は，五重塔木割，組物等の仕口，規矩からなるが，要点だけを抜書したものであることから，「工術抜書」の登録名が付されているので，あえて本書仮題とする。巻中に「二ノ巻」・「三ノ巻」・「七ノ巻」と記されており，「二ノ巻」・「三ノ巻」は，同館所蔵の『二之巻』・『三之巻』を参考にしていることが確認できる。

結局のところ，『（門外十七種）』，『三之巻』，『五之巻』，『（工術抜書）』は，文化・文政頃に大久保喜平治によって著され，このうちの一部が，当時江戸留学中の戸崎知重の手に渡ったものと考えられる。

㉔　『宮武集』（秋田県立秋田図書館所蔵）

---

(6)　『由緒書』他

筆写本，焦茶表紙，1巻，巻子本（24.7cm×1020.3cm）

本書も秋田佐竹藩大工戸崎家伝来史料である。もとは紺表紙が付いていたが，破損が著しくほとんど残存していない。「宮武集」の端裏書がある。

記載内容は，鳥居・組物・宝珠・高欄・竹の節の木割の後に，外繋・廏・付書院・小屋組等の雑作がつづく。図主体で比較的簡単な木割の説明が付されている。

奥書等筆写年代に関する記載はないが，戸崎家史料のうち，年紀を有するものでは享和3（1803）年が最古で[7]，大半は文化（1810）～嘉永（1850）頃に写されているので，本書も一応その頃の史料と考えられる。

㉕　『万宝柱立　番匠往来　全』（東京国立博物館所蔵他）

木版本，青表紙，袋綴，1冊，美濃本(26.2cm×16.9cm)，匡郭(21.6cm×16.0cm)，単辺，有界，版心「（丁数）」

刊記によると，文政6（1823）年正月に，東里山人が著し，須原屋新兵衛から出版されている。東里山人は先に『神社仏閣　柱建往来』を著しているが，本書はさらに対象建物を広範に扱っており，いわば続編にあたる。

㉖　『大工雛形』（国会図書館所蔵）

筆写本，茶波格子模様入表紙，1巻（全7巻），巻子本（27.6cm×458.7cm）

全7巻のうちの1巻が構法雛形である。本巻奥書に「文政八乙酉（1825）年／夏五月下旬」と記されている。また，他の巻には「東都大匠／立川棟梁軒藤原冨房／行年七十一歳」・「明和八（1771）年陽（10）月上旬」の記述がある。

立川（小兵衛）冨房は，初め大隅流（平内大隅政治から出た一派）を学ぶが，後に自ら立川流を名乗った人物で，安永3（1774）年に79才で没している。また2代立川小兵衛は文政3（1820）年に69才で没し，3代立川小兵衛は天保15（1844）年に67才で没している[8]。したがって，本史料は初代立川小兵衛冨房が著したものに，その子孫あるいは一門の者が補加して全7巻になったと考えられ，特に本巻は年紀から第3代立川小兵衛が著した可能性が高い。

本巻の記載内容は，組物の部材構成と組方に関するもので，まず立面図が示された後，下層から一層ずつ組物の見上図が描かれ，使用される斗の数量が記されている。

㉗　『上中下御建物并表門等堅メ様』（安田家所蔵）

筆写本，薄茶地斜格子模様入表紙，袋綴，1冊，横本（11.7cm×17.3cm）

扉題横に「安田幹茂」と記されている。安田家は，京都御大工頭中井家配下の並棟梁で，大和法隆寺西里に在住していた[9]。奥書はないが，同家所蔵史料のうち，安田幹茂(重)の名は，文

(7)　『大和絵様集』（立川小兵衛著，宝暦13年刊）の写本に「享和三 癸亥四月吉日 写之　戸崎惣左衛門」の奥書がある。

(8)　細川隼人『立川流の建築』，諏訪史談会　昭和47年刊参照。

(9)　島田武彦「中井役所の棟梁仲間(京都大工頭中井支配の棟梁について)」，『日本建築学会論文報告集』第33号，昭和33年10月参照。

政10（1827）年から元治元（1864）年の年紀を有する史料に見られるので[10]，本書もその頃に筆写されたと考えられる。

記載内容は，「上々之御殿仕様」・「中之御建物仕様」・「下之建物仕様」・「表御門仕様」の4項目に分けて，それぞれ「柱めんの事」・「内法貫」などというように，各部材の仕様を詳述したものである。

本書のように，建物に上中下の等級をつけた例は，江戸時代後期に幕府作事関係において利用された本途帳によく見られる[11]。

㉘ 『作事註文　番匠往来　全』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，青地紋入表紙，袋綴，1冊，美濃本(25.7cm×18.0cm)，匡郭(22.3cm×14.8cm)，単辺，有界，版心，「番匠往来（丁数）」

刊記によると，文政12（1829）年に，著者伊奈葉亭順三，書林須原屋茂兵衛と須原屋善五郎の合梓で版行（再版）されている。

記載内容は，他の往来本と同様に，建築用語を羅列しながら，構法一般を概説している。

㉙ 『（規矩鑑集）』（名古屋工業大学所蔵）

筆写本，無表紙，仮綴，1冊，横本（14.0cm×20.5cm）

奥書等筆写年代に関する記載はないが，本書と組で伝来の『大工手間并内訳』に，「文政六未（1823）年十月十四日許銀」の記述があることから，それ以降に成立したと考えられる。

記載内容は，ほとんど『大工雛形　規矩鑑集　帷指口』の引用である。

㉚ 『番匠往来　全』（東京大学所蔵他）

木版本，青地紋入表紙，袋綴，1冊，半紙本(22.2cm×15.4cm)，匡郭(17.0cm×13.5cm)，単辺，無界，版心「○（丁数）」

刊記によると，天保2（1831）年9月に，著者池田東籬亭，書林河内屋茂兵衛と近江屋佐太郎と菊屋七郎兵衛の合梓で版行されている。

記載内容は，他の往来本と同様に建築用語を羅列しながら，構法一般を概説したものであるが，冒頭および文中に，「斫始之図」・「上棟之図」・「町家表構之図」・「座敷廻縁側之図」，以上4図が見開きで収録されており，読者の興味を喚起する工夫がみられる。

㉛ 『規矩鑑集　木匠図録　全』（国会図書館所蔵）

筆写本，黄表紙，袋綴，1冊，美濃本（27.0cm×20.2cm）

奥書に「天保四己（1833）年四月三州松応寺御修復／在勤中写之／鈴木直恒」とある。

記載内容は，前述『（規矩鑑集）』とほとんど同じである。

---

(10) 『修学院上下御茶屋絵図』包紙に「中井御役所ヨリ借用瀉之／安田幹茂／文政十亥紀后六月吉」とあり，また『叡山坂本　惣絵図』に「安田幹重扣／元治元年四月写」とある。このほかにも安田幹茂筆写の史料は多い。

(11) 西和夫「本途と本途帳（建築積算技術の史的発展Ⅰ）」，『日本建築学会論文報告集』第120号，昭和41年2月参照。

㉜　『城之巻』（東京大学所蔵）

筆写本，浅黄地紋入表紙，1巻，巻子本（26.7cm×1572.9cm）

天保10（1839）年3月26日付，幕府大棟梁平内大隅廷臣の奥書に，「此緒（諸）絵図は，予か門人小野七右衛門厚徳が，／其父老親より見写せる所画図なりとて／所蔵せられしを，形珍らしけれはうつし／とゝめつ（後略）」とある。

記載内容は，櫓類の立・断面図，御殿の平・立・断面図等，および橋・門・塀・火の見櫓・蔵など付属建築の平・立・断面図と続き，最後に紀州粉河寺楼門組物が記されている。これらのうち，冒頭の櫓類および後半部付属建築は，記載順および説明文等に若干の相違はあるものの，ほとんど『諸絵図　全』と同じである。

㉝　『武家　全』（東京大学所蔵）

筆写本，茶布表紙，1巻，巻子本（37.8cm×1510.2cm）

幕府大棟梁平内家伝来史料であるが，奥書等筆写年代等に関する記述はない。

記載内容は，各種形式の門，御殿諸建築，および厩・鷹小屋・雪隠等付属建築，以上の立・断面図からなる。

㉞　『摂物立伏地図』（仙台市立博物館所蔵）

筆写本，黄表紙，袋綴，1冊，美濃本（29.1cm×19.5cm）

仙台藩大工朴沢家伝来史料である。裏表紙見返しに「朴沢直好」と近年の所持者の署名はあるが，奥書等筆写年代等に関する記述はない。

記載内容は組物組方について，立面図・伏図が描かれ，処々に木割や斗・肘木の数量が付記されている。

㉟　『屋根方葺様之巻』（中川家所蔵）

筆写本，紺地金模様入布表紙，1巻，巻子本（28.0cm×1076.5cm）

富山藩大工中川家伝来史料であるが，奥書等筆写年代に関する記述はない。

記載内容は，柿葺軒付・螻羽を主体とした屋根葺方に関するもので，図と詳細な説明文が記されている。

㊱　『木戸之図』（東京国立博物館所蔵）

筆写本，白表紙，袋綴，1冊，横本（27.7cm×38.8cm）

表紙に「木戸之図」，見返しに「木戸雛形」と記されている。奥書等筆写年代に関する記述はない。

記載内容は，木戸・柵・橋からなり，図には「清須町釘貫」・「小越町石橋」などと具体的名称が記されている。

本書のように雑建築のみをもって一書にまとめたものは，江戸時代中期以前にはほとんと存在しないので，一応江戸時代後期の史料としておく。

㊲　『番匠作事往来』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，朱表紙，袋綴，1冊，中本(18.1cm×12.2cm)，匡郭(15.4cm×10.3cm)，単辺，有界，版心「作事往来（丁数）」

表紙題箋（後補）および巻首題は「番匠作事往来」，扉題は「大工註文往来」となっている。

刊記によると，整軒（梅素亭）玄魚の校，（落合）大賀範国の図で，書肆万屋忠蔵から出版されている。刊行年は記されていないが，整軒玄魚は宮城路成の名で『建具雛形』（嘉永5年刊）を，また落合大賀範国も『大工絵様　雑工雛形』・『同　貳編』(以上嘉永3年刊)など，いずれも嘉永（1850）頃に出版している。したがって，本書も同じ頃に出版されたと思われる。

本文記載内容は，『万宝柱立　番匠往来　全』の本文の順序を入れ替えただけでほとんど一致しており，頭書の絵様・木割・継手・仕口に独自性がみられるだけである。

㊳　『大工番匠往来　全』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本・朱表紙・袋綴・中本（17.3cm×11.9cm），匡郭（14.8cm×10.1cm），単辺，有界，版心「（丁数）山静堂」

刊記によると，野口晋松堂が著し，書肆山崎屋清七と鶴屋嘉右衛門の合梓で出版されている。巻末の広告によると，著者は往来物を多く手がけた文人である。

本文記載内容は，先述の『番匠作事往来』と同じであるが，頭書では図が全く無くなっていることと，新たに家相に関する記述が加られるなどの相違がある。したがって，本書も『番匠作事往来』と同じく，嘉永（1850）頃に刊行されたと思われる。

㊴　『大工絵様　雑工雛形　貳編』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，紺表紙，袋綴，2冊，横本(12.8cm×18.8cm)，匡郭(10.7cm×17.0cm)，単辺，無界，版心「（丁数）」

本書は初編・三編とともに嘉永3（1850）年1月に刊行されており，上下2冊からなる。刊記によると，落合大賀範国が著し，彫工は江川仙太郎，版元は正文堂清七である。ほかに江戸須原屋・大坂秋田屋・越後扇屋などの書肆が名を連ね，全国的規模で出版されている。

記載内容は，標題のとおり絵様を主体としているが，加えて木割や規矩とともに，組物・門・垣等雑作の図が収録されている。

㊵　『新選増補　大匠雛形大全　一』（国立公文書館内閣文庫所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，1冊(全6冊)，半紙本(25.5cm×17.8cm)，匡郭(20.6cm×15.8cm)，単辺，無界，版心「〇大匠雛形巻一（丁数）」

刊記によると，嘉永4（1851）年11月に，著者山田泰平，版元須原屋茂兵衛で刊行されている。全6冊構成で，上棟式大意・小道具設計法・絵様等，建築の内外部から儀礼・道具までを総括的に把えて，体系的な建築書となっている。

構法に関しては，第1冊「宮殿之部　組物口伝　継目口伝」に，組物および継手・仕口等が記されている。

㊶　『彫物絵様（忍部保高伝来）（下）』（東京国立博物館所蔵）

筆写本，白地斜縞模様入表紙，袋綴，1冊（全2冊），横本（24.6cm×41.8cm）

巻子本を裁断し，袋綴2冊に改めたため，図の欠損が多い。外題は「彫物絵様」となっているが，これは袋綴に改めてからのものと考えられる。

奥書は，第2冊に「応需而図之早／忍部保高」とあるが，同じく第2冊なかほどに異なる筆跡で「嘉永四辛亥（1851）年／卯月上旬写／上田光忠（花押）」と記されている。そして文中に記された説明文もこれら2種の筆跡に分類できるので，本書は上田光忠と忍部保高によって著された異なる巻子本を裁断し，袋綴2冊に改めたものと考えられる。

記載内容は，表題のとおりほとんど絵様であるが，構法としては第2冊に鷹小屋・数寄屋・組物に関する記載がある。これらの部分の筆跡は忍部保高の筆跡と同じである。

㊷　『建具雛形　坤』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，紺表紙，袋綴，1冊（全2冊），横本(13.0cm×18.8cm)，匡郭(11.0cm×16.2cm)，単辺，無界，版心「建具下（丁数）」

乾坤2冊からなるうちの1冊である。第1（乾）冊に幕末の流行作家笠亭仙果（柳亭種彦門人）の序がある。第2（坤）冊刊記によると，嘉永5（1852）年壬子孟春（1月）に，樗室宮城呂成図，江川仙太郎刀で，須原屋茂兵衛から板行されている。

記載内容は，建具・欄間・小道具とともに雪隠が収録されている。

㊸　『彫物絵様（上田光忠伝来）（下）』（東京国立博物館所蔵）

筆写本，白地薄茶横縞模様入表紙，袋綴，1冊（全2冊），大本（28.7cm×21.5cm）

巻子本を裁断し，袋綴2冊に改めたため，図の欠損が多い。第2冊の奥書に「于時嘉永六癸丑（1853）歳／六月中旬図之／上田勝次郎光忠　花押」とある。

内容は，表題のとおり絵様主体であるが，構法としては，第2冊に数寄屋造の天井見上図・平面図・展開図と馬屋の断面図・詳細図・小屋組図，門の断面図等が記されている。このうち，馬屋に関する部分は他の部分と説明文の筆跡が異なっており，むしろ『彫物絵様（忍部保高伝来）』の忍部保高の筆跡に似ている。これらはいずれも巻子本を裁断して袋綴に改めているので，その時に混交が生じたものと思われる。

㊹　『当世　初心雛形　下』（東京都立中央図書館他）

木版本，青表紙，袋綴，1冊（全2冊），横本(12.2cm×18.0cm)，匡郭(10.5cm×16.6cm)，単辺，無界，版心「（丁数）」

刊記によると，嘉永7（1854）年甲寅初秋（7月）に著者落合大賀範国，版元須原屋茂兵衛で上梓されている。また著者の自序につづき，作家松亭金水の嘉永4（1851）年初冬（10月）日の序がある。

上下2冊からなり，絵様・規矩・構法・鳥居の木割など種々雑多な構成である。

構法の内容としては，下に妻飾り・小屋組が記載されている。

㊺　『増字　番匠往来　全』（国会図書館所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，１冊，半紙本(22.5cm×15.5cm)，匡郭(19.3cm×13.6cm)，単辺，有界，版心「匠家（丁数）」

刊記によると，安政３丙辰（1856）年仲夏（５月）に，著者鈴木驥園，書肆鈴木忠蔵で版行されている。

記載内容は他の往来本と大差なく，建築用語を羅列しながら，構法一般を概説したものである。

㊻　『新撰早引　匠家雛形二篇　下』（名古屋工業大学所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，１冊(全２冊)，半紙本(23.0cm×15.7cm)，匡郭(20.0cm×13.4cm)，単辺，無界，版心「匠家二編　下　（丁数）」

刊記によると，安政３（1856）年丙辰初冬（10月）に，著者本林重之助常将，書肆而楽斎と千鐘房（須原屋茂兵衛）の合梓で版行されている。

本書は上下２冊からなり，同著者の初編〔上下２冊，嘉永４(1851)年刊〕，三編〔上下２冊，明治８(1875)年刊〕とともに３部構成をなす。

記載内容は木割が主体であるが，構法としては下巻に組物が図示されている。

㊼　『初心手引　左官雛形　上』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，茶表紙，袋綴，１冊（全２冊），横本（13.8cm×19.7cm），匡郭なし

上下２冊からなり，上巻が構法雛形である。

下巻刊記によると，安政３（1856）年丙辰７月に，著者柴井重次，版元須原屋茂兵衛で刊行されている。

左官雛形とはいうものの，内容は土蔵だけを扱っている。左官工事のなかでも，土蔵が最も難しく，それだけに関心が高かったわけで，本書以後も『匠家　土蔵戸前雛形　全』〔明治15年〕・『匠家必用　土蔵雛形』〔明治16年〕など，土蔵を専一に扱った雛形本が刊行されている。

㊽　『（鎌縫之図等）』（金沢市立図書館所蔵）

筆写本，15枚（15.4cm×29.8cm）

加賀藩御大工清水家史料で，現在15枚残存するが，もとは巻子本であったと判断される。その中の１枚に「鎌縫ノ図」と記されていることから，金沢市立図書館ではこれを仮題としている。

記載内容は，一般的継手・仕口から障子の組子，板の矧方など，部材の接合方法を広く収録している。

奥書等筆写年代に関する記述はないが，内容から一応江戸時代後期の史料としておく。

㊾　『規矩真術　大工常用雛形　全』（東京都立中央図書館所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，折本，１帖，小本（15.4cm×7.6cm），匡郭なし

刊記によると，元治元（1864）年甲子春に刊行され，著者は鈴木勘右衛門正豊，彫工は鈴木栄治郎である。版元は須原屋茂兵衛であるが，京都・仙台・名古屋・山形・大坂の書肆も名を

連ねている。

内容は四方転の規矩と土蔵扉口の構法からなる。

⑤⓪　『増補　大匠雛形　新板　棚雛形　四』（蓬左文庫所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，1冊（全6冊），横本(14.7cm×22.4cm)，匡郭(12.5cm×20.4cm)，単辺，無界，版心「棚（丁数）」

「新板　宮雛形　壹」・「新板　武家雛形　二」・「新板　数寄屋雛形　三」・「新板　小坪規矩　五」・「新板　小坪規矩追加　六」とともに6冊構成である。

刊記に，「享保二（1717）年丁酉秋原刻／慶応二（1866）年丙寅春再版」とある。この原刻とは『大工雛形』（全6冊）のことで，本書はその増補再版である。第1冊表紙見返しに，再板図工として「宮形一巻　鈴木勘右衛門正豊筆」・「後五巻　本林重之助常将筆」が，また版元須原屋茂兵衛が記されている。

「棚雛形」についてみると，初版では第3冊であったのが，再版では第4冊となり，また記載内容では，棚図が斜投象となり，最後に筆返し，海老束等の仕口が増補されている。

なお，本書と全く同じ内容のものが『新撰　大工棚雛形　全』[12]〔明治9(1876)年〕として単独刊行されている。

3.　明治時代

江戸時代後期にひき続き，明治時代も約40年間に13本にもおよぶ雑作雛形が著されている。次にこれらの史料について考察する。

⑤①　『番匠秘事　左官図式』（国会図書館所蔵）

筆写本，濃緑茶表紙，袋綴，1冊，半紙本（24.2cm×16.3cm）

江戸幕府小普請方棟梁児玉家伝来本であるが，奥書等筆写年代に関する記載はない。

記載内容は，土蔵の戸口および扉・天井中心飾など漆喰彫刻の絵様からなる。このような漆喰彫刻は，江戸時代末期から流行しはじめ，入江長八[13]のような名工があらわれて，明治から昭和初期の洋風建築の装飾へと展開する。本書には洋風建築に特有の天井中心飾の図が記されており，しかもそれが和風模様であることから[14]，安政5（1958）年開港以降明治中（1890）頃以前に著されたものと考えられる。

⑤②　『改正作事　番匠往来　全』（東京大学所蔵他）

木版本，青表紙，袋綴，1冊，小本(17.3cm×11.3cm)，匡郭(15.3cm×10.0cm)，単辺，有界，版

---

(12)　岡本真理子『日本建築古典叢書5　近世建築書――座敷雛形』，昭和60年，大龍堂書店刊参照。

(13)　文化12（1815）年伊豆松崎に生まれる。12才のころから左官職に就き，のちに江戸に出て左官播磨屋の養子となって10代目金兵衛を嗣ぐ。漆喰彫刻に長じて多くの傑作を残している。明治22（1889）年に75才で没す。（結城素明『伊豆長八』，昭年55年復刻，伊豆長八作品保存会刊参照）

(14)　遺構において和風模様の天井中心飾が確認できるのは，旧山梨県東山梨郡役所（愛知県明治村，明治13年），豊平館（札幌，明治13年），旧新潟県議会議事堂（新潟，明治16年）など，いずれも明治初期の洋風建築である。

心「開化番匠（丁数）」

表紙題箋は「改正作事　番匠往来　全」，扉題・巻首題は「開化　番匠往来」となっている。また扉に「安保兼策編輯」，「東京　保永堂蔵板」とある。刊行年は記されていないが，上記のとおり「開化」・「東京」という用語から明治初（1870）頃の史料と考えられる。

記載内容は，一部省略および漢字使いに相異があるものの，ほぼ『万宝柱立　番匠往来全』と同じである。

㊽　『匠家　土蔵戸前雛形　全』（東京大学所蔵他）

木版本，紺表紙，折本，1帖，半紙本（22.6cm×15.3cm），匡郭（天地19.7cm），単辺，無界，版心なし

刊記によると，明治15（1882）年6月5日に，著者猿田長司，版元北畠茂兵衛で出版されている。

記載内容は，前半部が標題のとおり戸前に関するもので，後半部は火打貫通様，桁組合ほか構法・規矩に関するものとなっている。図と詳しい説明文が記されている。

㊾　『明治新撰　隅矩独稽古　中・下』（国会図書館所蔵他）

木版本，紺表紙，袋綴，2冊（全3冊），半紙本（23.6cm×16.0cm），匡郭（17.9cm×12.8cm），単辺，無界，版心「明治新撰　隅矩独稽古　中（下）巻（丁数）」

上中下3冊構成である。上巻表紙見返および下巻刊記によると，明治15（1882）年11月に，平原助次校正，内野清蔵編集で，林斧助によって出版されている。

規矩を主内容とするが，『独稽古隅矩雛形』（小林源蔵著，安政4年刊）の引用で，標題もこれに基づいている。雑作としては，中巻に木負・茅負の組方，下巻に箱棟・組物・幣軸等の詳細図が収録されている。

㊿　『匠家必用　土蔵雛形』（国会図書館所蔵他）

木版本，青地紋入表紙，袋綴（一），畳物（二），2冊，美濃本（25.8cm×18.0cm），匡郭（一のみ21.8cm×15.6cm），単辺（一のみ），無界，版心「（一のみ）大工家蔵雛形（丁数）」

刊記によると，明治16（1883）年5月に，著者安藤喜助，版元柳原喜兵衛で出版されている。全2冊からなり，第1冊は袋綴，第2冊は畳物となっている。

記載内容は，第1冊が土蔵全体の軸組・小屋組・扉口・窓・建具金物など，第2冊が扉口・窓の詳細図と角留切様となっている。

(56)　『改正　大工番匠往来　全』（国会図書館所蔵他）

木版本，藍地紋入表紙，袋綴，1冊，小本(17.7cm×12.2cm)，匡郭(15.3cm×10.2cm)，単辺，無界，版心「番匠往来（丁数）」

刊記によると，明治19（1886）年5月10日に，松本直方によって編集・出版されている。

内容は，『大工番匠往来　全』〔嘉永(1850)頃〕の本文を抄録したにすぎない。

(57)　『新撰作事用文　全』（国会図書館所蔵他）

木版本，薄黄表紙，袋綴，1冊，小本(17.9cm×11.8cm)，匡郭(15.9cm×11.0cm)，単辺，有界，版心「作事（丁数）」

刊記によると，明治21（1888）年9月29日に，釵持柳太郎によって編輯され，古文堂から出版されている。

記載内容は，『番匠作事文章』〔享和年間(1801～1803)刊〕と全く同一である。

㊽　『改撰雛形　工匠図解』（国会図書館所蔵他）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，3冊，半紙本(22.4cm×15.2cm)，匡郭(17.5cm×12.5cm)，単辺，無界，版心「改撰　工匠図解巻之上（中・下）（丁数）」

刊記によると，明治23（1890）年6月30日に，著者加賀本久太郎，版元竹内治郎兵衛で出版されている。

記載内容は，『明治新撰　隅矩雛形独稽古』〔明治15(1882)年〕の引用で，ただ記載順を変えたにすぎない。

㊾　『瓦割之部』（滑川市立博物館岩城家文書所蔵）

筆写本，白表紙，大和綴，1冊（全3冊），横本（13.5cm×20.0cm）

表紙中央に「瓦割之部」，表紙左端に「甲　岩城庄之丈」，裏表紙見返喉に「西京おいて／岩城庄之丈写之」と記されている。岩城庄之丈は東本願寺再建工事（明治13年～28年）に参加しているので，その折に写したものと思われる。『絵様之部　乙』・『絵様之部　丙』とともに3冊構成をなす。

記載内容は，本瓦葺とりわけ各種棟積や掛瓦の納まり，および檜皮葺の葺き方からなる。図を主体とし，適宜説明文が付されている。

㊿　『百垣之図　天』（滑川市立博物館岩城家文書所蔵）

筆写本，薄茶布表紙，袋綴，1冊，美濃本（26.8cm×19.4cm）

扉に「応需／香雪斎写」と記され，巻末には「明治三十三庚子（1900）年四月／伊藤信章氏より拝借す／岩城庄之丈氏之応需／太田暉石」と，「本書は当時小石川区に寄寓する／旧桑名藩士伊藤某の蔵書なるを／神田匠今川小路に居住する伊藤／信章氏に請ふて拝借し是写す／岩城庄之丈印印[15]」の2種の奥書がある。

記載内容は，表題のとおり百種の垣を収録したもので，淡彩の綺麗な図の傍にその仕様が略記されている。

(61)　『新撰座敷雛形　上』（京都府立総合資料館）

木版本，紺地紋入表紙，袋綴，1冊（全2冊），横本(12.5cm×18.3cm)，匡郭(10.7cm×16.5cm)，単辺，無界，版心なし

刊記によると，明治34（1901）年に，泉幸次郎によって著され，又間安次郎によって発行さ

---

(15)　この奥書は袋綴の袋になった部分に差し込まれている。

れている。

上下2冊からなるうちの1冊で，窓・天井の図案とともに縁・雪隠・湯殿・手水鉢屋根・垣・簀だれ釣等の雑作が収録されている。

㊷ 『大増補　規矩階梯　天』（国会図書館所蔵他）

木版本，白地紋入表紙，袋綴，1冊（全3冊），中本(18.5cm×12.8cm)，匡郭(15.3cm×11.2cm)，双辺，無界，版心「増補　規矩階梯　天ノ（丁数）」

『新選　規矩階梯』（江崎規定著，明治15年刊）の増補再版で，天地人3冊構成の1冊である。

第3（人）冊刊記によると，明治37（1904）年10月11日に，江崎定一の増補で，杉本七百丸翰香堂から発行されている。

初版の内容は，第1・2（天・地）冊が規矩，第3（人）冊が木割である。再版は，第1（天）冊に洋風建築の小屋組・窓枠額縁が，第2（地）冊に神社内部の木割が，第3（人）冊に棚・小道具が，それぞれ増補されている。第1（天）冊増補部分が構法に関する部分である。

㊸ 『和洋　家屋建築雛形』（東京大学所蔵他）

木版本，濃紺地紋入表紙，袋綴，3冊(全6冊)，横本(12.3cm×18.5cm)，匡郭(10.5cm×16.3cm)，単辺，無界，版心なし

全6冊構成で，表紙題箋は「和洋　家屋建築雛形　（冊数）」となっている。しかし，目録題は第1冊「大匠町家新雛形」，第2冊「流行新形　大工道具雛形」，第3冊「和洋　左官雛形」，第6冊「新撰座敷雛形」となっており，第4・5冊には目録題がない。このうち，第6・4冊は『新撰座敷雛形』〔上下2冊，明治34(1901)年2月25日刊〕を，第5冊は『座敷書院　新撰欄間雛形　下』〔明治31(1898)年8月10日刊〕を全面的に引用したものである。第1～3冊も表紙題箋とは全く異なる目録題であることから，他の公刊本の全面的引用である可能性が高い。

本書刊記は第6冊目にあり，明治34年2月25日発行，明治42年5月10日再版，著者泉幸次郎，発行者又間安次郎となっている。このうち，初版発行日，著者，発行者は前述『新撰座敷雛形』と全く同じであるので，これを初版とみなし，再版を本書全6冊の刊行とみなしているものと考えられる。

構法に関する内容としては，第1冊「大匠町家新雛形」に，倉庫（土蔵）扉口・窓・戸袋・揚店・小屋組・手摺・庇・塀・井戸屋形・門が収録され，また第3冊「和洋左官雛形」に，棚・暖炉・蛇腹・土蔵・塀・煙突・竈煉瓦等が，第6冊「新撰座敷雛形」に，縁・雪隠・湯殿・手水鉢屋根・垣・簀だれ釣等が収録されている。

結

以上，雑作雛形63本の書誌的考察を行なったが，最後にこうした史料が成立・展開あるいは普及・衰退した過程をまとめ（表―1），本稿の結論としたい。

1）わが国の建築書が約600本以上知られる現在，本稿で扱った雑作雛形63本は，規矩・木割・

絵様と混成のものが多いとはいえ，史料数も多く，決して軽視された分野ではない。

2) しかしながら，例外ともいえるほどに先駆的な『愚子見記　九』でさえ貞享元（1684）年の成立であり，活発な著述刊行をみるのは寛政（1790）以降である点は，大工としての職能意識を記す「日本番匠記系本」を先駆とする中・近世木割書の主流からすると，極めて後発のものといわざるをえない。

3) 雑作雛形の成立が遅れた原因としては，木割や絵様のように意匠に関するものは，様式主張や時代の嗜好を先取りして，自家の優位性を誇示する必要があったのに対し，中世末までに一応の発展をみた構法は，すでに基本的技術内容が確立しており，あえて建築書として体系化される必然性が少なかったためと考えられる。

建築書体系化の動向は，先述『愚子見記』が幕府京都御大工頭中井家の技術を集大成した形で，寛文11（1671）年～貞享3（1686）年頃に編纂され，また甲良家の『建仁寺派家伝書』全14冊が宝永（1710）頃に完成し[16]，平内家の『匠明』全5巻が最終的には元禄～享保（1697～1727）頃に完成[17]するなど，元禄期を前後する頃において一般化する。ところが，雑作雛形はそれよりも約1世紀も遅れて活発に著述刊行されているのであるから，単に技術書体系化の最終段階とみなすわけにはいかないであろう。

4) また，雑作雛形は，嘉永（1850）頃を境として，筆写本から木版本へと大きく変わっている。そのなかで，構法雛形としての内容を備えた建築関係往来本のみ享和年間以降活発に刊行されている点は，木版本雑作雛形の先駆として注目される。従来，往来本は初等教科書にすぎないという通念から，建築技術書としての評価はほとんどなされていなかったが，この際改めて評価すべきであろう。

5) 明治時代は，江戸時代後期にひき続き多数の木版本雑作雛形が刊行されているが，一部に洋風構法が収録されているほかは，ほとんど江戸時代の引用あるいは再刊にすぎない。

6) 結局のところ，雑作雛形は，往来本を先駆として公刊大衆化されることによって，江戸時代後期の建築生産機構の変革を促した点に，歴史的特質を認めることができよう。

以上，本稿では，書誌的考察にもとづいて歴史的特質を概括したが，これらの史料に記された技術内容および雑作雛形としての記載方法・構成様態等の変遷については，別稿を予定している。

---

(16) 内藤昌「大工技術書について」，『建築史研究』第30号，昭和36年。

(17) 伊藤要太郎『匠明五巻考』，昭和46年，鹿島出版会刊。河田克博・麓和善・内藤昌「四天王寺流基幹本の書誌と構成」，『日本建築学会計画系論文報告集』第412号，平成2年6月。

A Bibliographical Stuby on the Architectural Manuals "Zōsaku-hinagata"

by
Kazuyosi FUMOTO
(*Nagoya Institute of Technology*)
Katsuhiro KAWATA
(*Shusei Technical College*)
Akira NAITO
(*Nagoya Institute of Technology*)

Architectural manals on construction methods which were written between the Edo to Meiji periods are called "Zōsaku-hinagata". These have no connection with "Tsugite-shikuchi" in brackets and ends. The "Zōsaku-hinagata" are manuals on miscellaneous construction methods and various kinds of architecture.

In this report, we made the following conclusion from the bibliographical study of 63 "Zōsaku-hinagata".

"Zōsaku-hinagata" were written and published frequently after Kansei (1790). This was very late compared to the mainstream of modular-coordination sourcebooks, between the Middle Ages and the Modern Ages.

The "Zōsaku-hinagata" change obviously from handwritten copies to woodcut-editions after Kaei (1850).

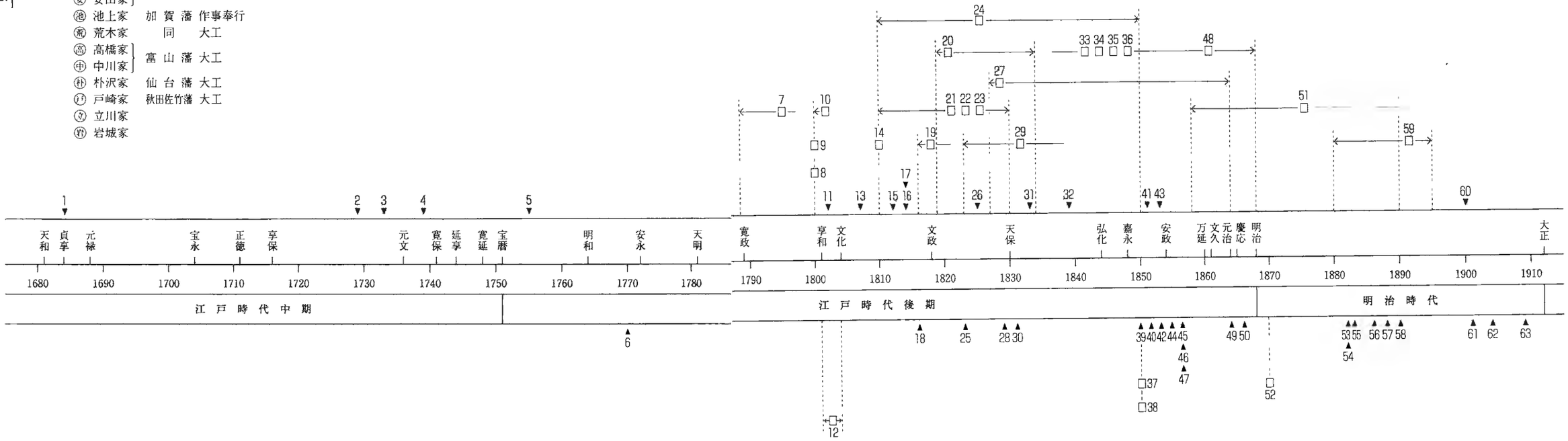
The transition of the architectural production system was facilitated by the publication and popularization of "Zōsaku-hinagata" in the later part of the Edo period.

筆写本

1 ㊀『愚子見記　九』
2 ㊁『御作事方仕口之図』
3 ㊁『組物』
4 ㊂『大工雛形　手鏡』
5 ㊃『角木図格　乾』
7 『造作弁図解　上下』
8 ㊁『大工雛形　規矩鑑集　蔕指口』
9 ㊁『諸絵図　全』
10 ㊁『御櫓向其外共』
11 ㊁『番匠秘事　瓦　全』
13 ㊄『和様唐様接物図并伏図』
14 ㊄『(高橋吉規伝来　組物図)』
15 『今西氏　家船縄墨私記　乾』
16 『(門外十七種)』
17 『祝融要務』
19 ㊁『蔕指図』
20 ㊁『組物桝肘木絵図』
21 ㊁『二之巻』
22 ㊁『五之巻』
23 ㊁『(工術抜書)』
24 ㊁『宮武集』
26 ㊁『大工雛形』
27 ㊁『上中下御建物并表門等堅メ様』
29 ㊁『(規矩鑑集)』
31 『規矩鑑集　木匠図録　全』
32 ㊁『城之巻』
33 ㊁『武家　全』
34 ㊁『攝物立伏地図』
35 ㊁『屋根方葺様之巻』
36 ㊁『木戸之図』
41 『彫物絵様(忍部保高伝来)(下)』
43 『彫物絵様(上田光忠伝来)(下)』
48 『(鎌縫之図等)』
51 『番匠秘事　左官図式』
59 ㊂『瓦割之部』
60 ㊂『百垣之図　天』

凡例

㊁ 甲良家
㊁ 平内家
㊁ 辻内家
江戸幕府　作事方大棟梁
㊁ 児玉家　同　小普請方棟梁
㊁ 今奥家
㊁ 安田家
同　京都御大工頭中井支配棟梁
㊁ 池上家　加賀藩　作事奉行
㊄ 荒木家　同　大工
㊄ 高橋家
㊄ 中川家
富山藩　大工
㊄ 朴沢家　仙台藩　大工
㊄ 戸崎家　秋田佐竹藩　大工
㊄ 立川家
㊂ 岩城家



▼ 年代確定史料
□ 年代推定史料

木版本

6 『番匠町家雛形　上下』
12 『番匠作事文章』
18 『神社仏閣　柱建往来』
25 『万宝柱立　番匠往来　全』
28 30 『番匠往来　全』『作事註文　番匠往来　全』
37 38 39 『番匠作事往来』『大工番匠往来　全』『大工絵様　雑工雛形　貳編』
40 42 44 『新選増補　大匠雛形大全　一』『建具雛形　坤』『当世　初心雛形　下』
45 46 47 『増字　番匠往来　全』『新撰早引　匠家雛形　二篇　下』『初心手引　左官雛形　上』
49 50 『規矩真術　大工常用雛形　全』『増補　大匠雛形　新板　棚雛形　四』
52 『改正作事　番匠往来　全』
53 54 55 『匠家　土蔵戸前雛形　全』『明治新撰　隅矩独稽古　中・下』『匠家必用　土蔵雛形』
56 57 58 『改正　大工番匠往来　全』『新撰作事用文　全』『改撰雛形　工匠図解』
61 62 63 『新撰座敷雛形　上』『大増補　規矩階梯　天』『和洋　家屋建築雛形』

表-1　雑作雛形成立年表